

今日の福音書は、前半は「最も重要な掟」として、神様を愛することのほかに、隣人を愛することが大切であることが、語られています。そして、今日の旧約聖書も、寄留者や寡婦、孤児などに親切にして、隣人愛が強調されていました。そして、日本聖公会は、本日の特祷から、隣人愛の祈りであることをくみ取り、本日を「社会事業の日」という日に設定して、信施金もそれにささげます。

私は宮崎に来る前、宗像では毎月ユダヤ教の勉強会をしていました。福音書では、ユダヤ教の指導者というのはイエス様と対決する相手であって、最後はその人たちがイエス様を十字架にかけたのだから、ユダヤ人は悪い人たちだ、という考えが一般的に広まり、現代まで続いてきています。それが第二次世界大戦のナチスによるユダヤ人迫害にまで及んでいることを考えさせられます。

でも、本当に当時のユダヤ教は、イエス様を異端と考えていたのだろうか？ユダヤ教には私たちの信仰と相いれない、悪いところがずっと引き継がれているのだろうか？という疑問が浮かびました。

私が牧師をしていて読んだ本の中で、特に刺激を受けた書物のひとつは、ラビと呼ばれるユダヤ教の教師のひとり、ハロルド・サムエル・クシュナーという人が書いた、「なぜ私だけが苦しむのか 現代のヨブ記」という本でした。

彼の息子は早老病という、幼くして年取ってしまう病気でした。子どもでありながら、背が低いまま老人のようなさ風貌になり、早くなくなってしまうのです。特に何か悪いことをしたわけでもないのに、短い命を運命づけられた自分の息子と向かい合いながら、クシュナー先生は、それまでのユダヤ教では当たり前と考えていた「神様は全能である。何でもできる方だ。」という考えに疑問を持ちました。そして、「神様は人類を愛しているし、幸福になってほしいと願っているが、神様にもできないことがある。」という結論を出したのです。

これには賛否両論がありますが、いろんな生活上の悩みを持っている人々に、彼の本は感銘を持って受け入れられ、ユダヤ教の人たち以上に、クリスチャンに読まれたのでした。私はこの本を近所のセブンスデー・アドベンチスト教会の牧師さんにも紹介しました。

そんなことから、私はユダヤ教の教えに関心が向いているのですが、また、「ユダヤ教の福音書」という変わった本を読んだことがあります。この本も、私の偏見を取り去ってくれる内容でした。私たちは、ユダヤ教と言えば、唯一神教。神様はひとりであって、三位一体のキリスト教の理解とは違っていると思われています。ところが、その本の解説を読むと、ユダヤ教にも、父なる神と子なる神という二つの神様の存在を認めている考えが、イエス様の生まれた頃にはもうあった、と言うのです。

そして、イスラエルを救うために、神様が自分の子どもをこの世に送る、というメシアについての考え方が、ユダヤ教の中の一部には受け入れられていた、という話まで登場します。そのメシアである子なる神は、雲に乗ってやってくるという風に理解するグループもいたらしいのです。

そのことを、旧約聖書や、その続編などを例に挙げながら、当時のユダヤ教の中には、もうキリスト教の三位一体の神様という考えが含まれていたこと。そして、逆に、私たちの読んでいる福音書などには、当時のユダヤ教としての文章表現もあって、イエス様が始められた、と言われるキリスト教は、ユダヤ教の一部であって、当時のユダヤ人には、ある程度理解できる集団だった。キリスト教とユダヤ教とが袂を分かったのは、4世紀のニケヤ会議以降のことである、と結論づけているのです。

代表的な、ダニエル書7章の記述を見てみましょう。この中に父なる神様を思わせる「日の老いたる者」とか、イエス様を思わせる「人の子」という表現が出てくるので、注意して聞いてください。

7:9 なお見ていると、／王座が据えられ／「日の老いたる者」がそこに座した。その衣は雪のように白く／その白髪は清らかな羊の毛のようであった。その王座は燃える炎／その車輪は燃える火

7:10 その前から火の川が流れ出ていた。幾千人が御前に仕え／幾万人が御前に立った。裁き主は席に着き／巻物が繰り広げられた。

7:11 さて、その間にもこの角は尊大なことを語り続けていたが、ついにその獣は殺され、死体は破壊されて燃え盛る火に投げ込まれた。

7:12 他の獣は権力を奪われたが、それぞれの定めの時まで生かしておかれた。

7:13 夜の幻をなお見ていると、／見よ、「人の子」のような者が天の雲に乗り／「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み

7:14 権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。

この7章からは、ダニエルが見た幻という形で、ダニエルに神様が示されたことが書き記されています。9節目に「日の老いたる者」という表現が出てきますが、これは明らかに神様のことを表現しているのですが、どちらかと言うと、歳を取った年長の神様のイメージです。それに対して、13節には、「人の子」という言い方で、別の存在が雲に乗って現れて、年取った神様の前に出て、14節の、諸国、諸族、諸言語のものを永遠に支配する、ということになっています。

ここに出てくる「人の子」という言い方は、イエス様がしばしばご自分を指して使われている言葉です。これは、単なる人間のことを言うのではなく、雲に乗って神様の所から地上にやってくる救い主のことであって、中東の古い神話に出てくる、年長の神々による年少の神々の任命の物語との関連で考えなければならぬ、と説明します。これらが、新約のテサロニケの信徒への手紙一の4章に影響しているように思えます。イエス様が再び来られる時、雲の中で私たちが再会する、というお話です。

つまり、ダニエルの見た幻は、父なる神が、地上に現れた子なる神に、権威を与えていることを指し、まさに神様の子がこの世に来ることを預言しているのだ、というわけです。このような表現が、旧約聖書続編のエズラ記（ラテン語）13章の最初に、出てくるというのです。それについてはもう今日は言いません。今まで話したことが、今日の福音書の後半と関連があることをお話ししなければなりません。

今日の福音書の後半は、「ダビデの子についての問答」というテーマで、ファリサイ派とイエス様の間で論争が行われています。この出来事は、イエス様が十字架に架けられる週の火曜日のことです。

その前の日には、イエス様は神殿の庭で大暴れをしましたし、その前の日には、ロバに乗って、オリブ山を越えてエルサレムに入城されたのですが、その時人々は、
「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」と叫んで、歓迎しました。

ですから、イエス様がファリサイ派の人々に、「あなたたちはメシアのことをどう思うか。だれの子だろうか。」と質問されたのに対して、ファリサイ派は「ダビデの子です」と当然のこととして答えたのです。

ところがイエス様は、そのダビデが歌った詩編 110 編を引き合いに出して反論します。

詩編 110 編は、元来はやがて世に出る王様のことを預言したのですが、メシアと考えていいでしょう。そして、神様とそのメシアとの関係を、ダビデが「主は、わたしの主にお告げになった。」という言い方で歌を始めています。

主という言葉が同じように 2 回使われていますが、元々の言葉を見ると全く異なる言葉です。

「神様（ヤハウェ）は、人の子である私のご主人様（アドナイ）にお告げになった。」という意味です。

ダビデが、「私のご主人様」と言っているのに、それがダビデの子であるはずがないだろう。ダビデより偉い存在だ、と言いたいのです。つまり、メシアは「ダビデの子ではなく、ダビデのご主人様だ」とイエス様は主張しているわけです。

しかも、その「ご主人様」という言葉は、単なる目上の人ではなく、それ以上の存在ではなかったか。

最初に、ダニエル書の「日の老いたる者」と「人の子」が、父なる神様と子なる神様の関係を表している、という本の話をしました。今日の福音書で、イエス様はまさに、メシアは、ダビデの子のような政治的指導者の単なる人間ではなく、神様からの救い主、神の子である、と宣言されたのです。そうしたことが、ファリサイ派には、神を冒瀆する者として、受け取られたのでしょう。

私たちは、神の子が、人々を救うために神様から遣わされた救い主キリストとして、イエス様を受け入れています。それは、イエス様が言い始めたことではなく、ダニエル書やこの詩編 110 編にも暗示されている、ユダヤ教の中で十分預言されていることなんだ、ということを改めて確認したいのです。

そして、私たちクリスチャンと同じ聖書を読んでいる、ユダヤ人に対して、敵対するのではなく、隣人愛、そして同じ神様を信じるものとして、理解を深めるものでありたいと思います。

今日は、隣人愛について学ぶべき主日でしたが、福音書の後半、ダビデの子についての問答から、説教しようと思ったので、印象に残ったユダヤ教の本など交えてお話ししました。